

助けてと言える社会へ



岡山市・県立岡山操山中1年 増本 雄太

どうしてこうなる前に誰かに相談しなかったのだろう。理玖君の母親は理玖君を残し、家を出ていった。トラック運転手の父親は、アパートの部屋に食べ物を置き、理玖君を一人部屋に閉じ込めるようにして仕事に行き、男手ひとつで必死に育てていたのだ。けれど、そんな生活も続かず、父親は次第に家から足が遠のき、息子から目をそむけようとしていった。もし親族や公的機関にお願いしてれば、こんなひどい結末にはならなかったはずだ。結局、この父親は一人で抱え込んでしまったのだ。

今、社会には、「助けて」と言えない人が増えている。「人さまに迷惑をかけてはいけない」と言い孤独死してしまう老人や、「生活保護なんて世間体が悪いから」とやせ我慢してしまう人。本当は助けが必要なのに、助けを受けず苦しい生活を送っている。

理玖君のケースでも同じことが言える。理玖君と最後に会った時、「お父さん行かないで」と理玖君はやせ細った体で精いっぱい声で言った。理玖君はちゃんと助けを求めていたのだ。けれど、この父親は、どこへ助けを求めればいいのか、もしくは、助けを求めることさえ頭になかったのかもしれない。知らなかったことが不幸につながったとも言えるだろう。だが、このような人を救済すべく、学校や子供がいる親に向けて子供検診の時などに啓発活動をするべきではないだろうか。

この事件では、もう一つ別の問題がある。それは、周囲の人たちが理玖君に気づかなかったのかということだ。マンションや地域内で交流があれば、

滴一滴

きのうの本紙社会面の記事に目を留め、この名前を忘れないでいたいと思った。斎藤理玖ちゃん。5歳で衰弱死し、7年以上もたつて昨年5月、遺体で見つかった神奈川県の子だ▼記事は、理玖ちゃんを栄養失調で死なせた父親に懲役19年の判決が言い渡されたと伝えていた。裁判長は父親に諭したという。「救う機会はいくらでもあった。どうすべきだったのか、事実と真摯に向き合ってほしい」▼理玖ちゃんが3歳のころ、母親が家を出た。父親は理玖ちゃんをアパートの部屋に閉じ込め、トラック運転手の仕事を続けた。帰宅時にはコンビニで買ったパンやおにぎりなどを与えていたが、理玖ちゃんは痩せていき、やがて死亡した▼父親をどんな言葉で非難しても足りないが、「それでも親か」と突き放すだけではこうした事件はなくなるまい。

父親にもある種の責任感があったのだろう。だからこそ、自分で何とかするしかないと抱え込んだ▼理玖ちゃんには祖父母もいた。しかし、父親は親族に頼ることも、ましてや公的機関に相談することもしなかった。「助けて」と言えない社会の中で、かけがえのない命が消えた▼公判で裁判員を務めた女性が感想を述べている。「周囲が無関心だったことが、事件の最大の要因だと思う」。そんな社会を、少しずつでも変えていかなければ。 2015・10・24

2015年10月24日付 山陽新聞

何か救う手立てがあったかもしれない。けれど、マンションなど隣にどんな人がいるのかさえ分からないのが現実だ。多くの人は他人のことまで構ってられない、心の余裕も関心もないのかもしれない。だから、いじめや虐待などがあっても、周りの人がうすうす感じていながら、見て見ぬふりをしてしまうのだろう。もし、周りの人が関心を持っていれば、何かシグナルを見つけられたかもしれない。周囲の無関心も大きな問題だといえるだろう。

今回の事件の中には、たくさんのお社会問題が隠されていた。私たちは、無責任な父親が起した事件として片付け、傍観しているだけではない。一人一人が問題に真剣に向き合い考えることで、本当に必要な人に「救いの手」を差し伸べられる社会に、また、「助けて」と言いやすい社会に変わっていくのだ。先日、法医学を児童虐待の見逃し防止に生かす臨床法医学が注目されている記事や児童虐待防止法などの改正案を通常国会に提出する方針が書かれた記事を目にした。社会が少しずつ変わり始めている。皆の意識で社会が変わっていきけることを感じた。私たちは他人事と思うことなく、社会の問題に意識を持って考え、声をあげて、皆が幸せに暮らせる社会をつくっていかなくてはならない。二度とこのように悲しい事件を繰り返さないために。

寸評

洞察し再発防止を考えています。高い表現力で、訴える力があります。

衰弱死した5歳児が7年以上たつて遺体で見つかった事件を取り上げ、さまざまな角度から